Osaka University Knowledge Archive

Title	初級日本語eラーニング教材開発についての実践研究 : 聴解教材の場合
Author(s)	簡, 珮鈴
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26223
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕

初級日本語eラーニング教材開発についての実践研究
―聴解教材の場合―

学位申請者　　簡珮鈴　　印

台湾においては教育の無償化、義務化が進み、学校教育も普及してきたが、質的に画一的で規格化された教育になりがちである。教育は本来個人差に配慮すべきだが、現状は、そうなっていない。台湾の学校教育においては、1人の教師が多くの学習者に対し一斉に指導する一斉指導型の授業がほとんどである。佐藤（2010）の『2009年度台湾における日本語教育事情調査報告書』によれば、台湾での日本語学習者数は247,641人、日本語教師数は3,938人で、教師1人当たりの学習者数は63人である。呉（2000）は、大学での第二外国語の授業がほとんど多人数（1クラス約70人）の授業なので、それぞれの学習者のレベルに応じて、授業を行うことが困難だと指摘している。また、台湾の日本語教育界では以前から、学習者の学習目的とニーズに合わせて編集した教材が非常に少ないので、オーダーメイド教育を実現するための1つの手段としてのeラーニングに期待する教師も存在している。しかし、これらの教師は教育現場にいる立場から、問題点がどこにあるかは分かっていても、具体的な解決案を持っていない。技術、ハードウェアなどが十分に整っていないので、教材のパーツ化、教材の共有・再利用、教材のインタラクティブ性が実現できない状態である。また、海外の日本語学習者は相対的に聴解力が弱いにも拘わらず、聴解指導法の不備という問題が残り、海外の日本語学習者にとって、より不利な学習環境に陥ってしまう可能性がある。したがって、筆者は、台湾での日本語学習者を対象にWeb聴解教材の開発に取り組んでいる。本研究は、実践研究としてPlan－Do－See（計画－実行－評価）というシステム的なアプローチを採用した。具体的に言えば、インストラクショナル・デザイン（Instructional Design）プロセスの代表的なADDIEモデルに基づき、頭文字からの「分析（Analysis）」、「設計（Design）」、「開発（Development）」、「実施（Implementation）」、「評価（Evaluation）」の5つの段階を経て、日本語聴解教育に役立つようなWeb教材のプロトタイプを設計・開発してきた。

聴解教育においては、学習理論に基づいた教材開発を進めるのが望ましく、また、単一の学習理論（例えば、行動主義論、認知主義論、構成主義論など）を別々に扱うのではなく、複数の理論を採長補短にしたほうが理想的と考えられる。第二言語の習得過程の視点から考えると、聴解は、音声言語を聞き取り（＝インプット）、言語知識を活かし、文脈・場面や関連知識を手がかりにし、音声から意味を構築するプロセス（＝理解できるインプット）である。これらのインプットした音声言語を理解できるインプットに変換するには、ボトムアップ・モデルとトップダウン・モデルの連携が必要である。聴解ストラテジーを使用することあるいはスキーマを活性化することは、学習者のボトムアップ・トップダウンの効率を高めることができるので、音声から意味を構築するスピードを上げることが可能である。また、視聴覚学習・マルチメディア学習で、音声・視覚的要素を補助的に用いることで、同じ内容でも比較的容易に理解でき、聴解学習に役立つと思われる。特に、近年の若者の日本語学習者は比較的年少のときから各種のデジタルデバイスにより、大量の動画を閲覧しており、ビジュアル重視の傾向が強く、インターネット使用頻度も非常に高い。日本語Web聴解教材を提供することにより、学習者は時間や空間の制限を超え、映像や動画を見ながら、聴解学習をすることができる。台湾人日本語学習者のニーズに応えることのできるWeb聴解教材を開発するために、筆者は、学習者分析とWeb聴解教材の実態分析を行った。学習者分析の結果、台湾人日本語学習者には、①実利志向、②コミュニケーション志向、③個人能力対応志向、④マルチメディア志向、の4つのニーズがある。Web聴解教材の実態分析の結果、オーディオ中心のWeb聴解教材が多く、マルチメディアを活用したWeb聴解教材とは言いがたい。また、台湾における日本語教育機関が提供しているWeb教材はほとんど「日本語音声素材のみの提供ができているサイト」である。実際に、日本語音声素材を提供するだけでは、自律学習時に学習者がどのように学習を進めてよいのか不明であり、「パーツ（日本語音声素材）の提供」＝「教材の提供」といった考え方を筆者は強く疑問視している。自律学習という前提で提供される教材は、教育方針・教授法を取り入れた一貫性を持つ学習コンテンツでなければならない。

これらの結果をもとに教育方針や教授法を盛り込み、日本語能力試験向けの聴解力の養成を目指すステップ・バイ・ステップのマルチメディア教材を目標として開発した。なお、開発した日本語聴解教材を実際に使用する学習者（台湾高雄第一科技大学応用日本語学科2年次に在籍する者）に配慮し、教材レベルの設定は初級とし、台湾人日本語学習者が聴解学習における問題点、①話し手の発話のスピードが速すぎる、②キーとなる表現が見つからない、③集中力が持続できない、④内容のポイント部分をつかむことができない、の4つの問題点を克服できるような日本語Web教材であるように設計し開発した。教材のシラバスは主に、①実態に基づいた聴解学習、②まとまりのある聴解学習、③語彙量・文型量の蓄積、④既存知識であるスキーマを活性化する聴解学習、⑤能動的に聞き取った情報を構築する学習、⑥ポイントとなる部分を見極める能力を養成する学習、⑦集中力持続の訓練、⑧繰り返し聞くこと、の8つの要素に凝縮した。また、授業実施にあたって、eラーニングの形態としては、まだ正式に認知されていない「タイアップ型eラーニング」を採用し、これまでeラーニングを実施した経験のない教師でも安心してeラーニングを活用できる支援体制を作り出した。台湾高雄第一科技大学応用日本語学科2年次の学生に1セメスター（2012年9月26日～2013年1月16日）補完教材として使用させ、その自律学習の効果を検証、評価した結果、元々の日本語能力の優劣を問わず、ポストテストで点数が上がった学習者は、自律学習への時間投入と課題の達成率が比較的高く、一定の時間を保ち長期間の自律学習を行ったことが分かった。また、1セメスターの自律学習を経て、学習者はより長くてまとまった会話内容を聞けるようになる傾向が見られ、聴解力の向上が認められた。しかし、重要箇所が比較的分散した会話内容を把握する能力には期待した伸びが見られず、今後強化すべき課題となっている。教材満足度について、本研究での日本語Web聴解教材は、①教材内容、②インストラクショナル・デザイン、③学習補助と支援のいずれも学習者からほぼ肯定的な評価を得た。筆者は教材を開発するにあたり、汎用的なデータフォーマットの1つであるXMLを使用し、デジタルの特性（データの共有と再利用）を活かすことにより、Web教材を作成するための労力を減らし、かつ効率化することを実現した。具体的には、直感的にXMLのデータを作成することのできるツールであるIPEditorを利用し、YouTubeに投稿された動画を秒単位に分割し、自動採点及び即時確認ができる紙芝居的な発想の日本語Web聴解教材を作成した。これは自己満足に終わる教材作成、聴解学習ではなく、デジタルの特性を活かして多くの教員が利用可能な汎用的な仕組みを作ることを意図しているので、他の日本語教師が筆者の開発した日本語Web聴解教材を部分的に修正、あるいは全面的にアレンジすることが可能である。実際に、インターネットを通じて、YouTubeのような動画投稿サイト、あるいはYahooのようなポータルサイトなどから、最新の情報を簡単に入手できる現在では、以前に比べて多種多様な教材素材の入手が可能となった。この種の素材の共有と再利用により、本研究での日本語Web聴解教材は多くの教師の手でさらに違った形へと進化することが可能であり、より質の高い、かつ多種多様な手厚い教育を実現することになろう。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　簡　珮鈴　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	細谷　行輝
	副 査　教授	渡部眞一郎
	副 査　准教授	小口　一郎

論文審査の結果の要旨

論文タイトル：初級日本語eラーニング教材開発についての実践研究−リスニング教材の場合−

本論文では、オーダーメイド教育を実現するための一手段として、eラーニングの観点から、学習者の学習目的とニーズ並びに効果的な教育方針・教授法を取り入れた、一貫性を持った日本語Web聴解教材を扱っている。具体的には、YouTubeに投稿された動画を、リンクからのアクセスにより著作権上の問題を引き起こすことなく利用しつつ、教材側で秒単位に分割し、自動採点及び即時確認ができる紙芝居的発想の日本語Web聴解教材を作成している。その際、汎用的なデータフォーマットの1つであるXMLを使用し、デジタルの特性（データの共有と再利用）を活かすことにより、Web教材を作成するための労力を減らし、かつ効率化することを実現している。

第1章で研究目的と研究方法を述べた後、第２章では先行研究を包括的に議論し、eラーニングの学習理論、日本語教育の現状と課題、聴解教育の方法論を概観している。第3章は、台湾における日本語学習者および日本語Web教材の実情を調査したうえで、Webベースの日本語聴解教材の設計を提案している。これに基づいて第4章では直感的にXMLデータを作成できるツール、IPEditorを利用した教材開発を詳述している。真の意味で優れた教材を開発するためには、教育実践からフィードバックを得て改善していくことが必要であるが、第５章、第６章はそうした実践・改善プロセスの報告である。第５章は台湾の高雄第一科技大学の学生を対象に１セメスターを費やして行った、教室授業とeラーニングタイアップ型の教育実践を論じ、第６章ではそこから得られた知見により、教材を改良していく方針が示されている。結論部である第７章は、本論文全体を概観したうえで、eラーニングによる日本語聴解教育のさらなる可能性について展望し、論文全体を締めくくっている。

本論文の執筆者の問題意識には、自己満足に終わる教材作成ではなく、デジタルの特性を活かして多くの教員が利用可能な汎用的な仕組みを作ることがある。事実、開発された日本語Web聴解教材は、他の日本語教師が部分的にあるいは全面的にアレンジすることが可能である。実際、インターネットを通じて、YouTubeのような動画投稿サイト、あるいはYahooのようなポータルサイトなどから、最新の情報を簡単に入手できる現在では、以前に比べて多種多様な教材素材の入手が可能となっている。第７章では、今回作成された日本語Web聴解教材が、この種の素材の共有と再利用により、多くの教師の手でさらに違った形へと進化することが可能であり、より質の高い、かつ多種多様な手厚い教育を実現することになろう、と結論付けている。

本論文では、eラーニング教材を設計・開発するにあたって、学習者の目的・ニーズを念入りに調査し、これを精緻に分析するとともに、eラーニングに不慣れな教師とタイアップする形で、自ら作成した聴解教材の効果を検証している点、そして何よりも、他のユーザによるアレンジが可能で、発展性のある教材フレームワークを完成度の高い形で提供している点に新規性、独創性が認められ、台湾でも高い評価を受けている。反面、対面授業とeラーニング形式授業との比較が難しいことから、教育実践の分析に十分とは言えない面もあり、今後、さらなる工夫が求められる。しかしながら、こうした点を考慮しても、本論文全体の価値は些かも揺るぎなく、博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと認める。